

町長

ひとりごと

(61)

斉藤 讓

わが家の脇の坂道は、台地の浄水場へと続いている。この坂道を、毎朝四時半になると、決って新聞配達のパイクが、エンジン音を響かせ、唸りながら登って行く。雨の日も、風の日もそれは変わることがない。私はいつも、それを寝床の中で聞き、それからもう一寝入り決めこむのであるが、今頃の寒い朝や、雨の日などは殊更にご苦労が偲ばれて、なかなか寝つけなくなったりもする。有難いことだと感謝する気持ちと同時に、寝床でぬくぬくとしている自分に、何となく後ろめたさを感じてしまふのである。

▼私の一日の日課は、恥かしながら先ず、トイレの中で新聞を読むことから始まる。そしてそれが、朝食を食べながらも続くので、家族の皆さんから、行儀が悪いと顰蹙を買っている。これはまさに、何かをしながらの「ながら族」のすることであり、我れなが

新聞は朝新聞受に入っているのが当然だと思いきんでいる。聞けば、外国には日本のような新聞の宅配制度はないということである。

▼人は誰でも、豊かな生活を追い求めている。現代の世相が映し出す、その豊かな生活とは、金や物が沢山あって、あらゆるものに便利で、しかも労働時間は短かく、余暇時間も限りなく長い生活態様を



指しているようだ。私には、これではどこか心棒が抜けているように思えてならない。これと対極にあるのが、いわゆる3K(きつい・きたない・きけん)に身を置く生活ということだろう。

最近、鉄筋工や汚水処理の現場社員に、働き甲斐があるからと、若い女性が集まってきているという話を聞かすが、依然として3Kの分野への人

々、特に若者の眼は冷たい。世の母親の中にも、せめて我が子には、件の豊かな生活が保障される職業に就いて欲しいと、何が何んでも大学進学、それが無理ならせめて専門学校にでもと、まるで子供を傀儡にした軽薄な教育熱に、憂身を侷す者もいる。それに反発のできない、子供も子供ながら、それに何とも言えない父親も父親であり、情ない限りである。

▼職業に、貴賤の別などあるはずがない。私は3Kの持つ問題は、職場としての問題よりも、むしろそこに働く人達が、自信と誇りを失なっていることの方が、もっと重大であると思っている。人の一生は、長いようで短い。どんな経緯があるにしろ、自らが選んだ職業に、情熱も誇りも持たず、不満だけを持つ人の人生は、淋しく不幸だと言わざるを得ない。自分の仕事に不満を残し、せめて子供に夢を託そうなどということは、一見親心のように見えるが、私はそんな考えは、正当ではないと思う。自分の人生は、子供のためにではなく、自分のために存在する一度きりの

ものだ。子供のために犠牲になるなどといった美談は二の次にして、自分の仕事に驕りに取り組み、励むことである。私は、仕事こそ人生の心棒だと思っている。だから、これを疎かにしては、人生の充実や、生活の真の豊かさを得ることはできないと考える。子供にとつて、親の背中が、人生の教師である。

▼ところで、人間の欲望は、発明の母であり、社会を発展させるエネルギーの源泉でもある。従つて、私達が日常生活の豊かさや、便利さを追求することは、極く自然であり、当然のことである。しかし、このことは、逆に言えば脱3Kを旨指すことを意味する。そこで、私達が忘れてならないことは、豊かさや便利さを求めれば求めるほど、それを支える人々の働きが必要となり、しかもそこに働く人々の仕事は、粉れもなく3Kの分野であることだ。私は、この矛盾が共存できる条件は、いかなる対極にあらうとも誰もが自分の仕事に誇りを持ち「御陰様で」という日々感謝の気持ち忘れなれないことだと思っている。